理事長コラム〈17〉〝世界を生きる〟

学校法人 渡辺学園理事長　菅谷 定彦

日経米州編集総局長時代③

ブラック・マンデー対応で 米州総局の実力フルに発揮

日本経済新聞社の初代米州編集総局長の業務が軌道に乗ってきた1987（昭和62）年10月19日の月曜日朝、ニューヨーク株式のダウ平均株価が突如暴落を始め、終値で先週末に比べて22・6％暴落。1929（昭和4）年10月24日、3年続きの世界恐慌の引き金となったブラック・サーズデー（暗黒の木曜日）の12・8％を大幅に上回る史上最大の大暴落となった。これに伴い10月20日の東京株式市場では日経平均が14・9％急落。これも空前の値下がり、世界主要国の株価も全面的に暴落した。

私は直ちに在ニューヨーク全幹部、記者の会議を招集、途中マンハッタン中央部の銀行や証券会社の支店に長い行列が出来つつあるのを見ながら、総局に駆けつけ、日本経済新聞、日経金融新聞、日経テレコン、Quickなど新聞・ネット発信への方針と段取りをしっかりと決定した。株式暴落の震源となった米国では今回のブラック・マンデー1カ月前に、大幅な経常赤字をカバーするとともにインフレとドル急落の予防措置として公定歩合を3年半ぶりに引き上げ6％の高水準とした。しかしニューヨーク株暴落の前週には貿易収支の大幅赤字が発表されていた。

一度は入居を検討したトランプタワー（5番街56丁目）の前で（1987年7月）

わが国はこの年の6月以降、卸売物価が急ピッチで上昇、日本銀行は公定歩合引き上げの機会をうかがっていたが、日本が上げれば日米の金利差が縮小しドルが急落するとの懸念でそのタイミングを逃していた。一方西独は物価高抑制のため日本とは逆に金利を若干引き上げた。これに対し、ベーカー米財務長官は「為替水準安定のための協調介入」を主要5カ国で決めた1985年9月のプラザ合意に反すると強く批判、各国の協調を前提としていた米証券市場が米・日・独の経済大国3国間の金利政策の〝きしみ〟と受け取った。

このためブラック・マンデー直前の円・ドル相場は10月4日の1ドル＝147円からドル安に転じ、ニューヨーク株式も売りが先行していた。加えて世界の株式市場はブラック・マンデーまでの2年間でバブルの気配を見せ始め、日米の時価はこの間2倍強に上昇「上がり過ぎへの不安」をはらんでいた。総局会議でも全員この事実は知っていたが、空前の暴落の発生は世界中のマーケット専門家も誰一人予知できなかった。

ニューヨーク出張中の吉村元日経ニューヨーク特派員（前列右端　後日経BP社長）と総局メンバーで夕食会（1988年夏）。吉村さんと菅谷は同時期にニューヨーク特派員
前列　左から田尻編集部長、植村記者、菅谷
後列　左から瀬良記者、実記者、関山編集部次長、佐々木記者、小孫記者

多忙で食事も満足にとれない中の総局会議で私が指摘したのはウォール街の株式取引での構造変化。コンピューターを駆使して高速、高頻度で取引ができるプログラム売買技術が急ピッチで取り入れられ、このことが必要以上に株価を乱高下させ今回のような大暴落につながる要因になっていると話した。

幸いと言うべきか暴落した世界の株価は1カ月足らずの11月10日、日経平均で21、036円を底に反転、恐慌には至らず短期間で収束した。この要因の一つはわが国の大蔵省が①4大証券にブラック・マンデーの翌日、直ちに大規模な株式買いの「意向」を伝え、証券会社が大量の買い出動に入った②特金（特定金銭信託）、ファンド・トラストにもガイドラインを緩和して株式購入を促したことにある。このことはわが国経済のバブルの加速に繋がったが、世界恐慌を食い止める効果はあった。

いずれにせよ総局の全員が全力で新聞、ネットに報道・配信した結果は日本の他紙・通信社を圧倒、めったに人を褒めない太田・東京本社編集局長から「よくやった。森田社長も高く評価しているよ」との電話が入った。

翌1988年2月、ワープロ導入など総局体制最後の仕上げでブラジルの首都サンパウロに出張した。出発時のニューヨークは摂氏で氷点下20度、8時間のフライトで到着したサンパウロはなんと40度で厚手のコートを持つ左腕は汗まみれ。乗ったタクシーは窓が全開で気持ち良かったがドライバーがハイウエイを猛スピードで走るので同乗の原田サンパウロ支局長に「あまり飛ばすなと注意しろ」と伝えると「ブラジルのハイパーインフレーションには、これ位飛ばさないと追い越される。しっかりつかまっておくんせえ」と原田君の通訳。一瞬唖然としたがユーモアのある返事に思わず吹き出した。

直行したサンパウロ支局で入念な打ち合わせ、夕食の後原田君に連れられ女性のサンバのプロダンサーが躍る劇場へ。ショーの終了直後「誰か私と一緒に踊りませんか」とトップダンサーが叫んだので私は「ハーイ」と大声で応え一人で舞台に上がり3～4分間ダンサーを相手に二人きりで踊りまくり、満場の拍手を受けた。相手に合わせて腰を振りまくってのサンバダンスは激しかったが劇場内の冷房が効いていたのか汗は出ず、中学1年から大学4年まで10年間テニスの選手として鍛え抜いた腰も全く無事だった。

米州編集総局長に赴任して多忙な一年だったが、サンパウロ出張で疲れがすっかり取れ2年目への意欲を新たにできた出張だった。

※次号は〝世界を生きる〟「日経米州編集総局長時代④」です